

目的 一般家庭における洋式便器の普及を背景とし、障害者・高齢者による利用や国際化への対応を視点として、公的建築物においても洋式便器の導入が積極的に図られている。しかしわが国では、公衆トイレにおける洋式便器の利用に抵抗感を示す人々が多く、利用効率上の問題を指摘できる。本報告はこの事実に着目し、和洋便器の選択行動における諸要因の影響を明らかにし、要因間関連および優先性に関する分析を試みるものである。

方法 盛岡市在住の10～60歳代の男女を対象とし、便器の使用歴、和洋便器の選択および選択理由、健康・身体状況、清浄観などに関する自記式質問紙による調査を実施した。調査により得られた有効サンプル数は1065、調査時期は1994年 9月～11月である。

結果 公衆トイレにおける和洋便器の選択は「洋式」17.3%「和式」62.9%「こだわらない」18.6%である。「洋式」は男性および50歳代以上の高齢群、「こだわらない」は20歳代が有意に高く、家庭での洋式使用歴10年以上で洋式選択が増加する傾向を示す。高齢群の場合には家庭での使用に伴う慣れおよび身体・健康上の理由が洋式志向に大きく影響している。「和式」選択の場合には、30歳～50歳代の85%が不特定多数使用による不衛生を指摘し、10歳代の22.1%は使用歴に関係なく「洋式」の使用拒否を示す。さらに清浄観にかかわる11項目の回答を数量化し、総点と便器選択との関連をみると、清浄観が高くなるほど「和式」選択が増加し「洋式」選択が減少する傾向が明らかである。便器選択と公衆トイレに求めるものとの関連では「洋式」選択者が楽しさ、くつろぎ、高級感を志向する傾向が顕著であり、空間の質的充実が洋式便器の利用促進につながると考えられる。